

見逃してはならない血液疾患 病理からみた 44 症例

北川昌伸, 定平吉都, 伊藤雅文(編)

岡山大副学長

吉野 正

重要・高頻度の疾患を中心に 診断過程を疑似体験できる書

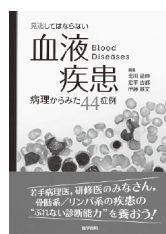
血液疾患は種々の病態が鑑別にあがり、また分子病理学的にも多様で、全体像を深く知ることは容易ではない。WHO 分類も版が増すほどに疾患概念が増加し、専門家といえども全ての領域を通暁することは困難なほどである。しかし、疾患病理発生上の分子基盤における知見は非常な勢いで増加し、その成果ともいうべき分子標的薬の開発は目覚ましい勢いで進んでいる。そのような現況により、血液疾患はかなりの深度で疾患概念を整理することが求められている。このたび上梓された『見逃してはならない血液疾患 病理からみた 44 症例』はわが国の骨髓病理をリードしている編集者の下で企画された、画期的な著書である。

具体的な疾患について、その病歴、検査データ、形態像から診断に至る過程を懇切丁寧に示している。同様の観点と意図により編纂された病理関係の著書は皆無ではないが、焦点を血液疾患に絞り、治療と予後、また、鑑別診断と類縁疾患について詳述したものは、評者の知る限りほかにはない。ある疾患については病態生理や染色体あるいは責任遺伝子異常、また分子標的薬についての作用機序などバラエティーに富んだ記述と豊富な図表が駆使されていて、ざっと眺めているだけでも得るところがあるほどである。教科書を編纂するときある種のルールを設けることにより整然とした書物となるが、本書はそれをあまり強制していない。血液疾患の多様性を思うとき、それは仕方のないことであり、そのようにしなかった編集者の思いが伝わってくるようである。

主訴が各項目の「題目」となっていて、それから患者さんの病歴、検査等々に進んでいく様式は、慣れていない読者にとって最初はなじみにくい部分があるかもしれない。しかし、実際臨床的

あるいは病理的診断に至る過程はこのような様式の繰り返しである。したがって、最初のページから丹念に内容を追いかけるのが最良の方法ではないかもしれない。そのような道標として、本書では各疾患の頻度と難易度が明示されていることも特長の一つである。すなわち、頻度が高い疾患は遭遇する機会の多いものであり、難易度が高くないものから挑んでいくことによって血液疾患の全体像を俯瞰することができるのではないかと思われる。

最初に記したように血液疾患のスタンダードは WHO 分類になっているが、収載されている疾患はとてつもない数に増加している。頻度がいかに低くとも臨床、病理学的特徴が明らかなものは疾患単位となり得るからである。しかし、実臨床を行う上からも、病理診断をなす上からもそれと同等の知識が常には要求されないのは自明の理である。極めて重要かつ頻度の高い疾患を中心に据えて、その診断過程を疑似体験するという段階、最終的な結論を得るまでには鑑別診断が必須のものとなり、それを契機に周辺疾患への目配りをするという本書のねらいは、巧妙でかつ成功している。一つだけ加えるとすれば、本書の対象は若手病理医、研修医とされているが、臨床実習のグローバル化に向けて急速に変貌している現況では、医学生にとっても非常に重要な本となることを強く信ずるところである。



●B5/頁288/2014 年
定価：本体 6,500 円＋税
[ISBN978-4-260-01674-2]
医学書院 刊